

マスコミが無視した強制棄教

悪質・巧妙化した拉致監禁

脱会屋・牧師が手法を「指南」

この法治国家を揺るがす人権侵害、特に自由権（信教の自由など内心の自由、経済的自由、人身の自由）を踏みこむ悪行が日本国内で50年以上も続いてきた。

松永牧師が「救出するには」として電話を切っておくなど保護説得（拉致監禁）の手法を説明する映像

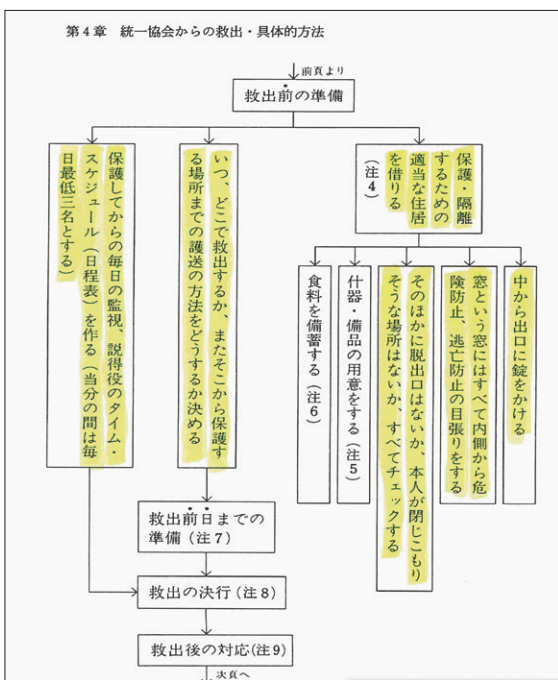


事実は決して軽いものではない。

信徒の脱会工作は当初、教会施設に閉じ込めて数日〜1週間ほど牧師が説得するという形式だったが、その後、全国に拡大する中で、拉致監禁・脱会強要を生業とする脱会屋まで登場し、手法がだんだん悪質化・巧妙化した。1987年冬ごろには、父母教育↓拉致監禁↓棄教説得（脱会意思表明）↓強要↓（脱会意思表明）↓脱会確認↓（監禁が解かれ）リハビリ生活としての拉致監禁説得の手法というシステムがほぼ完成したという。

2度にわたって拉致監禁の被害に遭った医師の小出浩久さんの場合、ドアの取っ手にチェーンが巻き付けられ、窓は固定・目張りされた。生活空間は6畳1間に限られ、隣室（6畳）には見張りが常駐した。その閉鎖空間に脱会屋と呼ばれる宮村峻氏と元信徒らが頻りに訪ねてきて教理、教会、教祖の批判を威圧的に繰り返すのだ。二つ目の絶望的な状況として、「家族の異常な言動、行動」がある。子供を拉致監禁すること自体が異常だが、密室で脱会説得が思い

「統一協会 救出とリハビリテーション」(田口民也編著)に具体的に記載された脱会強要マニュアルの一部



拉致監禁の実態について講演する医師の小出浩久さん



通り進まない」と、「感情を高ぶらせ、突然、私に殴る、蹴るの暴行を加えてきた」(小出さん)という。

本来なら最も頼りたい両親から人格を全否定されるのだから、その心痛は如何ほどだったか。このような親の異常な言動は小出氏に限ったことではない。さらにひどい仕打ちを受けた人も多く、異常な環境下で、人知れず悲惨な状況が繰り返されてきたのだ。

両親や親族が、なぜそこまで非人道的なことが出来るのか。それは、脱会屋やキリスト教牧師などが信徒の親族を集めて徹底的な教団批判の教育と拉致監禁の「指南」(教唆、補助)を行っていたためだ。小出さんの父親は脱会屋の宮村氏に逐一状況を報告・相談し、その指示に従って行動していたという。小出さん自身も2度目の偽装脱会の際に松永堡智牧師が自らの教会で毎週土曜

日の午後6時から3時間行っていた「父母勉強会」の手伝いをしたことを証言している。当時、新潟、長野、山形、富山などから信徒の親族が50人も集まり、そこでは教団の活動や教理などを徹底批判するだけでなく、「監禁前や監禁中、脱会説得後に親はどのような子供に接するか、拉致から監禁、監禁後の手ほどきを解説した『対応』」まで教え込むビデオが用意されていたという。

松永牧師の講話や元信徒の脱会体験談(監禁説得の「成果」)などが語られ、月に1、2回は元信徒と親族の相談会もあり、そこで親族は、「統一教会は反社会的な犯罪者集団であり、そこに入った子供も犯罪者なので、子供を救出することには人の親として何より重要なことである」とハッパを掛けられ、拉致監禁しないことを説得される。そして、拉致監禁しないと決意した親族には、拉致・監禁のための具体的な指導、模擬訓練を行う「2DAYS」セミナーまで行っているのだ。

脱会活動に名を借りた拉致監禁は、人権(自由)を蹂躪し、親子の絆をズタズタに切り裂く被害を生む。また拉致監禁による棄教強要という犯罪行為を父母や親族に行わせ、犠牲となった「元信徒」も次の犯罪行為に加担させている。とんでもない人権蹂躪を繁殖させていたのだ。

光言社

改訂版

「人さらい」からの脱出

違法監禁に二年間耐え抜いた医師の証言

1992年から1994年にかけて実際に拉致・監禁された、医師の体験談。「反統一教会グループ」は、親族にどのようにして拉致・監禁の教育を行うのか、また元信者は、統一教会(現、家庭連合)から脱会した後、どのような生活を送るのかを、そのグループに所属しながら見聞きした自身の経験をもとに、赤裸々に綴る。

【目次】

- 第一章 十五カ月間の監禁生活
 - 一、統一教会への入信
 - 二、拉致・監禁
 - 三、東京のマンションでの説得 ほか
- 第二章 反統一教会グループの一員として 改宗請負人の手先に
 - 一、新津福音キリスト教会での生活
 - 二、異様な雰囲気土曜日の父兄勉強会
 - 三、「2DAYS」で拉致・監禁の技術指導 ほか

小出浩久 著

◎定価 1,540円(税込)
◎四六判 232頁

